第45回「てのひら文庫賞」岐阜県読書感想文コンクール

今井鑑三賞 作品

今井鑑三賞

6年自由図書部門／読んだ本・夏の庭

「人との関わり」

瑞穂市立生津小学校　牛島巧人

「また来いよ、待ってるよ。」

曾おばあちゃんは、富士山の麓に住んでいて、そこはそんなに簡単には行けない場所なのにいつも帰り際に決まってこう言った。曾おばあちゃんに会えるのはうれしかったけど、遠くて、知らない人ばかりで遊ぶものもない、ぼくにとって曾おばあちゃんの家は楽しい場所ではなかった。だから何度も言われるこの言葉に気が重たくなっていた。

ぼくが以前に読んだこの本をまた読み返したのは、曾おばあちゃんが亡くなって、曾おばあちゃんへ抱く感情がこの話と重なるように思えたからだ。

ちょうどぼくと同じ小学六年生の主人公三人が、「人が死ぬところを見たい」と思い、死期が近そうな変わり者のおじいさんの観察を始める。おじいさんはテレビばかり見ていて、ゴミ袋は家の外に放置したままで、手入れをまったくしていないボロボロの家に住んでいる無気力な人だった。主人公の三人も特にやりたいことが見つからず、退屈な日々を送っていた。ある日、おじいさんを尾行しているのがおじいさんに気づかれて、初めは煙たがられるが、あれよあれよと洗濯や庭の草ぬきの手伝いをさせられて、主人公たちはおじいさんとの時間が楽しくなってくる。三人は、自分のお昼ごはん代をおじいさんの庭に植えるコスモスの種代にして、庭一面にコスモスを咲かせようとしたり、得意なサッカー教室を休んでまでおじいさんを手伝い続けたりして毎日熱中した。おじいさんもペンキの塗り方やのこぎりの使い方を教えたり、昔話をしたりした。三人の子供と過ごしていく中でおじいさん自身の生活も生き生きしたものに変化していった。ひと夏の間に、おじいさんは三人のことを考え、子供たちはおじいさんのことを想い、お互いになくてはならない存在になっていく。目には見えない絆が生まれていった。そしてぼくもこの三人の仲間に入れてもらったかのようにおじいさんと過ごしているのを想像して本を読んだ。

だが、元気にしていたおじいさんが死んでしまう時がくる。突然にきた。物語に入りこんでいたぼくもしばらく茫然として遠くを見ていた。おじいさんは子供たちが来るのを待ち、四房のぶどうを並べて眠っていた。最後まで子供たちのことを考えていたことに胸が熱くなった。ひと夏の間でこんなにも人のためを想って一生懸命に生きられることをうらやましく思うと同時に、人は人との関わりで生きる力を得ることができる、また生き方も変わることがわかった。

ぼくは曾おばあちゃんに積極的に会いに行かなかったことを曾おばあちゃんが亡くなってから後悔していた。曾おばあちゃんが生きている時間に限りがあることをわかっていなかったし、その残された時間もぼくと関わることで曾おばあちゃんの生活がより良くなったかもしれないなんて思ってもいなかったからだ。でもぼくは主人公の一人である木山から前向きになれるヒントをもらった。木山はおじいさんにたくさん話したいことがあった。おじいさんが亡くなる前に行った合宿のことや友達と大げんかしたことなど。そしてこれから進路に困った時に相談したかったし、大人になってからビールを一緒に飲みたかった。それが出来なくなってさみしさと心細さを感じたけれど、「結局全部、ぼくの問題なのだ」と気づくシーンがある。そこでぼくはハッとさせられた。

ぼくが後悔しているのは、結局ぼくの問題なのだとわかった。後悔してるだけでは何も変わらない。曾おばあちゃんに話したかったことやしてあげられなかったことを痛いほどわかっているのだから、その失敗を繰り返さないようにこれから前を向いて生きたら良いのだと気づいた。限りある時間の中で家族、友達やぼくに関わる大切な人のためにぼくの時間を使えるのは「今」しかない。大切な人たちのことを想って積極的に行動する「今」を積み重ねていけばぼくには後悔が残ることはないのだ。

まずはできることから実践していきたい。自分のことよりも家族のことを優先してくれるお母さんに有り難いと思ったら、今すぐに言葉にして伝えよう。小学校での生活も残り少なくなってきたので、友達とは共に過ごせる今を大切に、たくさん話して笑って楽しもう。やるかやらないか迷った時には「やってみる」方を選んで主体的に取り組もう。人と関わることでぼくの人生も変わって行く。ぐっと前を向いて気持ちが前進したように感じた。ぼくの気持ちが強くなったのも、曾おばあちゃんが身をもって教えてくれたのだと思う。後悔するのではなく、それをバネに前に進もうと。